

単言語主義の息苦しさを超えて

理事 境 一三

息苦しいこの国が、最近ますます息苦しくなっているように思われてならない。美しい日本をとりもどし、日本人の自信を回復するというとき、その「日本」はいったいどんな日本なのか？ いつか見た悪夢の「日本」であるならば、まっぴら御免蒙りたい。

日本人の、日本人による、日本人のための「日本」よ再び、との主張が一段と声高になる一方で、私たちの足下を「グローバル化」の波が洗っている。この国の経済を支えるために労働力が国外から流入し、様々な言語と文化を持った人びとが、私たちの隣人として暮らすようになっていく。この国の人口減少は容易には食い止められないだろうから、今後ますます多くの人びとが、この国に働き場所を求めて、私たちの共生者となるだろう。

この国で将来的に有望な産業の一つとして観光業がある。フクシマ以降激減した外国人観光客も、このところ増加傾向にあるようだ。あれだけ落ち込んでいた北海道の経済でさえ、観光業の好調が牽引車となって、活況を呈しているという。

このように、日本の至る所で多くの言語が聞かれ、さまざまな文化が接しあうようになってきた。しかし、それを迎える「日本人」の側は、とてもそれに対応できるような準備ができていないように見えない。お金を落としてくれる「外人」はともかく、この国に住む、隣人としての異言語・異文化人に対して、私たちはどこまで心を開き、自分を知ってもらおうと同時にかれらを知る努力をし、共にこの社会を作っていくという覚悟ができていくだろうか？ この国の将来を考えると、外国にルーツを持つ人びととの共生だけが、生き残りの道なのではないだろうか。

そこで危惧されるのが「日本」イデオロギーである。「日本」を声高に宣揚するとき、同時に異質なものの排除が起こる。それは、インターネットで「ネトウヨ」と呼ばれる人たちに、また街頭に出てヘイトスピーチを繰り返す人びとに顕著に見られることだ。それが、「美しい日本」を掲げる政治家たちの言動とどうやら同じ方向を向いているらしいことが恐ろしい。

私たちの専門とする言語・文化に関して言えば、この国では、内向きのベクトルを持った「国語」と、外向きのベクトルを持った「英語」しかない極端な単言語主義と単文化主義が支配しているように見える。その二つの言語は、一個の人間の中で相互に働き合って一つの人格を高めていくという方向にはなかなか行かない。英語は「日本人」

を育てる要素ではないようなのだ。ある種の潔癖主義かも知れない。だが、まさにこの点に言いようのない息苦しさを感じるのだ。

ましてや英語を超えた言語と文化の学習には、大多数の国民の意識は向かない。同じ町内にブラジル人が、フィリピン人が、タイ人がいようが、かれらの言語と文化に関心を持たない。かれらは十把一絡げに「外人」と呼ばれる。そして、「外人」用には「英語」があるだけなのだ。その「外人」たちが「英語」を解するかどうかに関係なく。

地方自治体が、そこに住む異言語・異文化人のために、ホームページで重要な情報を複数言語で提供し、小学校では教員たちが日本語を理解できない保護者と格闘する一方で、「日本人」の保護者たちは、自分が話すことの(必要)ない「英語」を、自分のこどもが流暢に話すことを夢見る。(そして、英語産業がそれを煽る。)かれらが、「英語」以外のことばが同じ小学校の学区の中で話され、それが自分のこどもの同級生の人格やアイデンティティーを形作るものであることに思いをいたすことは、およそないだろう。

私が研究のフィールドとするヨーロッパでは、長年にわたって平和共存、言語・文化の多様性の保持、地域アイデンティティーとヨーロッパ・アイデンティティーの形成が、言語教育との関連で議論されてきた。もちろんその背景には、偏狭なナショナリズムと国家間の軋轢に苦しんだかれらが、それをどのように乗り越えるかという格闘の歴史があった。それを経て、今ヨーロッパは、少なくとも私にとっては日本より息苦しくない世界になっている。英語教師が英語の世界に留まっていなくてはならないということはないし、ドイツ語教師である私が英語教育のことを語っても、また言語教育全般について議論しても良いのだ。

こうした場が、研究レベルでは日本でもようやく育ちつつある。そして、単なる研究のレベルを超えて、行政や立法に一丸となって訴えかけることもその任務とする組織として 2012 年 12 月に JACTFL が誕生した。言語種の壁を乗り越えた協働の場として、十全の機能を果たすことを期待して止まない。もちろん私自身も微力を尽くすつもりだ。

(慶應義塾大学)